者の板ばさみに会って，農民から軍政監部の協力者と烙印され後者の憎悪の的となった。むしろ，官吏達は履行不可能な軍部の要求と怒りに燃えた農民の間にはさまれた犠牲者であると佐藤氏は考察している。

佐藤論文は実証的に研究されなかった官吏の立場を再考したことで高く評価されてよい。

南方開発金庫（南発）の研究はこれまであまり研究されなかったのが現状である。柴田論文は占領下のインドネシアでの通貨政策の一端を知る意味で有益である。

占領後，軍は敵性銀行を仮差し押えし，横浜正金銀行，台湾銀行が先ず銀行業務を開始し，三井，華南銀行が続いて操業を始めた。軍はギルダーと等価とした軍票を通貨として流通し，43年3月軍票使用が停止されるまでに流通した軍票は3億5,300万ギルダーに達した。

一方，政府は南発を進出日本企業の資源開発資金調達機関として設置した。インドネシアではジャカルタに支金庫，スラバヤ，セレベス，セラムに出張所が設けられ，43年4月に南発は社債を発行した。これ以後，南発券は軍票に代って占領地域の通貨となった。終戦後も46年3月まで英軍は南発券を通貨として流通させた。またインドネシアも独立当初南発券を法貨として使用していた。

本書は日本，オランダ側研究者が参加して研究成果を纏めたものであるが，欲を言えばインドネシア研究者の参加が望ましかった。

日蘭研究者が新しく発掘した史・資料を駆使した研究成果はインドネシア軍政史に新たな光を与えるであろうし，両国の研究者に多くの示唆を与えるであろう。将来日蘭の統治比較研究だけでなく，満州，朝鮮，台湾，中国における植民地統治，ドイツの植民地統治等の比較研究が行われることを望んでいる。それによって，日本の軍政統治の性格がより明確となるであろう。

執筆者達は戦後生れの研究者であるだけに，占領期研究に特別な感情を抱かず，また特定な思想にとらわれず，客観的に事象を分析している。そのためか，全体的に論争的論評が見られず，稍々物足りない読後感が残る。

編集者によれば本書は占領期のインドネシアに焦点を置くと述べているが，記述の大部分がジャワに集中しているので，本書のタイトルは不適当な感じがする。

一，二点誤認と誤訳があるので指摘しておく。クラ鉄道の正字はKraであり，同鉄道建設地区はマレーシア領ではなくタイ領である（120頁）。造船局の英訳はShipbuildingの方が適訳である（同頁）。

（明石陽至・愛知淑徳大学）

Daniel S. Lev; and Ruth McVey, eds. *Making Indonesia: Essays on Modern Indonesia in Honor of George McT. Kahin.* Ithaca: Cornell Southeast Asia Program, 1996, 201p.

1996年，コーネル大学東南アジア・プログラム創設者のひとりであるジョージ・ケーヒンの功績を讃える論文集が刊行された。ケーヒンは，『インドネシアにおける民族主義と革命』という「古典」を記し，戦後のインドネシア研究を切り拓いた。[1] その後はインドネシア研究だけにとどまらず，東南アジアの国際関係に関する話題作をつぎつぎと刊行してきている。[2] ケーヒンのもと，コーネル大学は戦後アメリカの東南アジア研究を主導し，その中核にインドネシア研究があった。

主題「インドネシアを作ること」（"Making Indonesia"）は，「インドネシアを構成するもの」を意味する"Making of Indonesia"とは明らかに異なる。[3] 本書は，「インドネシア」を構成する政治・経済・文

1）*Nationalism and Revolution in Indonesia* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1952)。

2）ケーヒンの主要作品として，ここではつぎの2点のみをあげておく。*Intervention: How America Became Involved in Vietnam* (New York: Korf Press, 1987); *Subversion as a Foreign Policy: The Secret Eisenhower and Dulles Debacle in Indonesia* (with Audrey Kahin) (New York: Korf Press, 1995)。

3）後者の視点から編集された論文集として，J. A. C. Mackie (ed.) *Indonesia: The Making of a Nation* (Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University, 1980) がある。

化的要素には関心をもたない。構成物を重視する視点にたつと,「インドネシア」が歴史的な「自明」として存在するかのような誤解をあたえかねないからである。これに対して，本書は,「インドネシア」を歴史的形成物とし，いまだに形成過程にある実存としてとらえようとしている。

本書の底流となっている主旋律は，マクヴェイの導入的エッセイ「巨獣の構築」が明示しているように,「現代インドネシア」をいかに理解するかという点にある。20世紀に誕生した「インドネシア」とはなにか,「インドネシア」にとっての「近代」とはなにかという問題意識が，各論文に多かれ少なかれ共有されている。とくに,「インドネシア」の国家と社会，民族と国民を形成している歴史的背景と拘束性，そしてその展開に，焦点が当てられている。

本書は9本の論文からなっており，それぞれの論文は，大まかに時系列的に並べられている。以下，本書構成にのっとって，各論文を簡潔に紹介したい。

アンダーソンとムラゼクは，オランダ植民地期のナショナリズム現象を扱い,「インドネシア民族」の形成に迫っている。アンダーソンの「言語・ファンタシー・革命」は，激動の時代における，ジャワの世界観の「近代」との対峙を論じる。鉄道や新聞という「近代的」制度が，ジャワ人の時間・言語観に革命的変化をもたらした。新聞に代表される出版資本主義は，選挙，指導者，階級闘争，権力，集会などの新しい政治的言語を「インドネシア」に広め，定着させた。こうして20世紀前半，インドネシアに「近代」という「革命」的状況が生まれた。エリート民族主義者シャフリルは，このような時代潮流のなかで生まれ育った。しかし，かれは1935年に，植民地期に強制収容所として名高かった西ニューギニアのボーヴェン・ディグールに流刑された。「ボーヴェン・ディグールでのシャフリル」で，ムラゼクは，インドネシア政治史上におけるボーヴェン・ディグールの意義を，シャフリルの「眼」をとおして描いている。現実政治や人民から隔離された「普通の」生活空間で，シャフリルは「非政治的」手紙をオランダ語で記し,「西洋近代」と植民地下にある「封建的東洋」について思いをめぐらせていた。そして，7年にわたる「流刑」の身から解放された後，かれは現実政治に身を投じ，独立インドネシアの政治的指導者の一人となってゆく。

1945年8月17日の独立宣言後，インドネシアは対オランダ独立戦争期に突入した。1940年代後半の政治指導者の格闘については，ハーヴェイとヘイドゥスが，外交とバンカ島の動向から分析している。ハーヴェイは,「インドネシア民族革命における外交と武装闘争」のなかで，ヴェトナムの対フランス革命・戦争体験と比較しつつ，インドネシアがオランダとの全面戦争ではなく，交渉による解決を選択した経過を見ている。民族主義運動自体における急激な社会革命の否定，政治指導者間の分裂，社会の多様性，アメリカの外交プレッシャーが，主たる要因であった。他方，独立宣言時に副大統領であったハッタは，1948年，オランダによってバンカ島に流刑された。しかし，ヘイドゥス論文「我々の若かりしころ」が明らかにしているように，バンカ島でのハッタは，主権獲得のための交渉の席についていたシャフリルら同僚たちと定期的に連絡を取り合っていた。ここが，外部の政治勢力との関係を遮断されていた，植民地期の強制収容所と様相を異にする点であった。そして，外交努力の結果，1949年，インドネシアは主権を獲得する。

1950年代から60年代は，独立後のインドネシア政治がもっとも活気に満ちた時期であり，それはPKI（インドネシア共産党）抜きに語ることはできない。マクヴェイの「インドネシアの共産主義における民族主義，革命，組織」は，当時大勢の若者を惹きつけたPKIの魅力を語る。そこでは，PKIの組織と組織化に具現化された「近代性」とそれが有する一種の宗教性,「共同体」として機能していた党の存在感が指摘される。しかし，1965年のクーデター未遂事件とその後の反動によって，PKIは壊滅状態に追い込まれ，党員とシンパはインドネシア全土で虐殺された。バリ島は，虐殺がもっとも徹底的かつ残酷におこなわれた代表的空間であった。「クーデター後バリでの虐殺」で，ロビンソンは，バリの文化的要因による説明を退け，バリ島での虐殺は，PKIをめぐるバリにおける政治闘争とそれに便乗した国軍が引き起こしたものであったと議論する。

大量虐殺という恐怖の記憶のうえに，スハルト「新秩序体制」は誕生した。新秩序体制は蘭領東イン

ド植民地国家の伝統を引き継ぎ，各種ルールの法制化と官僚組織の充実とを図った。レヴ論文「国家と社会の狭間で」は，社会の側面から，法律家という専門職の役割を強調している。かれらは，新体制下において成長しつつある「都市中間層」の代弁者となり，「民主化」促進の一翼を担う。これに対し，白石の「インドネシア国家の再配線化」は，ハビビの台頭と官僚帝国の形成を科学技術の重要性の増加と並列して論じる。そこでは，開発政策のもと，国家の安全保障戦略の一環として科学技術が認識され，それを支える組織，思想が，過去20年間の新秩序体制下の社会に浸透してきており，変容しつつあるインドネシア国家の姿が指摘される。ところが，変容しているのは国家ばかりではない。バンネルたちが「コミュニティ・レベルの参加，土着のイデオロギー，活動家の政治」で示唆しているように，社会も同時に変容しているのであり，1990年代にはすでにNGOの重要性を無視できなくなっている。しかし，NGOの役割は，組織の目的によって異なり，そこには対立が生じることもある。ジョクジャカルタのコミュニティ開発を担うベセスダ病院の活動は，かならずしも政治的問題に積極的にかかわっている法律援助会（LHB）と同一視できるものではない。とはいえ，NGOの活動は，容易に国境を越え，国際的なNGO組織と共同歩調をとり，情報交換ができるという強みがあり，それがインドネシア社会変革へも少なからず影響をおよぼすことは確かである。

以上の要約からもわかるように，本書は，網羅的ではないにしても，20世紀におけるインドネシア政治史の展開を見事に表わしている。しかし，本書には共通の問題意識があるとはいえ，各論文の問題設定，アプローチはけっして統一されてはいない。むしろ，論文ごとに，それぞれの「インドネシア」が描かれている。ところが，個々の論文にはつながりがないとはいえ，全体からはぼんやりと「インドネシア」が見えてくる。

それは，端的にいって，「インドネシア」とはさまざまな顔をもった対象だということである。そして，「インドネシア」がすでに確固なものとして確立されたものではなく，いまだに形成過程にある姿が浮かびあがってくる。「近代」とは，既存の枠組を変える意識，運動，空間であったし，いまでもそうであることには変わりない。つねに変革の「過程」にあるからこそ，一つの「インドネシア」像を描きだすことにはあまり意味がなく，「過程」にあるからこそ，多様な「インドネシア」が存在する。重層的で多元的な「インドネシア」には，異なる位相があり，さまざまな「層」が刻み込まれており，それらが「インドネシアを作って」いる。

しかし，本書は「インドネシア近代」の抽出に主眼をおいているために，「伝統」の側面が若干疎かになっている。反植民地ナショナリズムがそうであったように，独立後の国民国家形成過程で，「古き」伝統に新しい意味があたえられ，しだいに国家・民族の「伝統」と化してゆく。そうした新しい「伝統」も，時が経つにつれ「伝統」として「忘れ去られる」。ここにも，20世紀インドネシアにおける，時代とともに変化する「伝統」の姿を認めることができる。「伝統」も「近代」の産物となっている。[4)]

植民地期ナショナリズム，独立後のPKI，そしてスハルト「開発体制」は，「インドネシア」という「未来」を見つめる巨大な「近代化」プロジェクトを具現化してきた。しかし，その歩みは，ボーヴェン・ディグールやPKIを「否定」した大虐殺などによって中断され，軌道修正を余儀なくされた事実は見逃せない。21世紀を眼前にして，「インドネシア」はどこへ向かおうとしているのか。インドネシアで「一つの時代」が終焉をむかえたいま，「巨獣」インドネシアの「国家」と「国民」が歩んできた道を振り返る意義はますます高まってきている。

（山本信人・慶應義塾大学）

Peter Bellwood. *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago.* Revised edition. University of Hawaii Press, 1997, 384p.

本書はオーストラリア国立大学考古学科において考古学Readerの職にあるベルウッド（Peter Bellwood）による東南アジア島嶼部，特にマレーシアおよびインドネシアを主たる地域とした考古学の

4）たとえば，Henk Schulte Nordholt（ed.）*Outward Appearances: Dressing, State & Society in Indonesia*（Leiden: KITLV Press, 1997）所収の諸論文を参照。